特別
15
1828
1

特
イ5
1828
1

丙子毫保
5(三)

##節分の歌

二月の二日節分の前奏曲として稀有意外と称送し帰路自動車内でつくづく感じた。節分の豆蒔きの興味の全く青春時代にあるもの。あの荒荒男女が無心にキャッキャと騒く賑いぶり、自老境に入りて恰も夢裡の想像する思ひ。なるほど。全体の節分の行事は家族のむつまじい狭い家庭にやつてゐる興味かもしれない。行事が賑はしいこと。自分が四舎を委ねた頃は時代の事を想ふと、家も広かつた家族と仕用人をも併せて通例三十人位家の居つた。家庭の親摸が北使び賑ふと、節分の豆蒔もやり甲斐があつた。屋から隣室、隣僧の部屋くまく隈なく蒔と相乗んで時間もかゝつた。北多べいどんも祝意の愛へも年男い立入る。指利びあつたりて、年下輝めをいやからせた。北庵は自然毎祷講の慈悲であつたりて、男女い入り亂れて豆撒を極め、終りを果てれ、年男を撒しを胴あげをやつたこ

52-9891 (1)

節分の歎

二月の二日節分の前奏曲として稍老外を送り帰路の自動車内でつくづく感じた。節分の豆蒔きと の興味の全く青春時代にあるもの。あの元気男女が無心にキャッキャッと騒ぐ賑はひ、自老境に入るこの淋しい夢裡の想像さへ思ふ。全体の節分の行事は家族のなつかしい狭い家庭へやつてゆく興味がある。行事が賑はひ、こうした。自分が四金を奏した少兒時代の事を想ふと、家も庭も家族と仕用人とも併せると通例三十人の住家で長つた。家庭の親摸が此位であると、節分の豆蒔もやり甲斐があつた。母屋から隠宅、婢僕の部屋くまなく隈なく蒔と相乗れ時間もかかつた。北多べいとん炬燵の変へも年男が立入る権利があつたので、年男下婢などをいやがらせた。北庭は自然毎樓講の感であつたので、男女が入り乱れて豆撒を極め、終りの果ては、年男を捕へて胴あげをやつた。

豆拾いて

2

孔が、まくと実は、これ陽氣なることで、一家淋しかぬき驚きとなる
るが、平生博さんもあつる者談所とか年男とかもと、胴上を抱し
て騒ぎたることもあつた。自分の家も家例として孔子べへ
一同で酒を飲ーたが、孔氣部いまだ春の深い時、ものあるの
に、家のすべい時きめ春日氣分が漲つて、小兒でさへ
ら自分の脇腹を感じたが、今いどうかと、相変ら
ず主を蔭くけんとも、一家麻痺なるが、真に分苦の
感を惜くらい、偶々也前いあるの郎分賦を演じたことと
分前七年先てからの追儺スいい興味かるもの歟に、孔
老ほ孔を鬼と共に外へ掃き出さるいのいせめて
の幸ひとこあるが、私も前と同感同歎
と禁ず。

3

3 江戸見の任侠

私が青年時代或る江戸見から聽へた今高見記憶まあるのいたり一話である。江戸名い諸藩の屋敷がまうも名抱くうんも通りかの外出一ちゃ門限まい必ずまう帰らが ばまうまあ観則もあつた。邸内のあう奉公人が外出中、久方振りで懇意の仲間と会つた、珍らしがつて互ひに立流をくもみる内、門限の時が迫つたうで、屋敷まへかまふ帰れ、どうかく行つて一杯傾やりたい所が、門限がまうも遠慮ちゃう。そ孔が出来ない。

4

のアヽ国（ひとちのて一杯飲人比様ゝでセメテも言ひる
こゝ、[illegible]今しが比罪ヲ手ヲ下けてあれ陶器も
悔し気ものゝ地上ゝ抛つて形微塵ゝ。[illegible]こんで業
がヤット海人比と言ふ別人比と比法い言葉考へると江戸
兒が人前に見せた張つ[illegible]れ[illegible]きろい[illegible]
[illegible]実いろ〳〵ろ〳〵複雑
お原因からナンナのお業前が生[illegible]ろのであるのは自然に江戸兒ハ
[illegible]封建時代の環境に任侠的の業前を養成せられ
犠牲的精神をとうかすることに関くが、以上の輝活をも
共の一端に過ぎない。去かし江戸兒の業前の測深
も尋ねると、随分古い時代まで溯ゝ[illegible]
と我い比時平安隆氏の中世紀の精神生活を考へ
人で感じた。其中に「源平盛衰記」をひき言の校お

5

送別会の記事のあるべき筈の所に、[illegible]と共に、江戸紀
象性の淵源も古くいつの頃と感じ堅実記の記事は、
日吉神社の祭礼、[illegible]武士成田兵衛方成が不都合が
あつた廉で伊賀へ流罪の憂目に会ふことまで、共
別れを惜んで同僚共が集つて送別会を
開いた席上、段々酔が回つると、

甲が「兵衛殿田舎へ帰下向の祝着に進ずべき
[illegible]、便宜よくば、[illegible]礼ごとを侯へ」
とモトいひ切つて[illegible]抱り出した、つゝいて
乙「穴面白やあれが芳くべきか」

注意を惹く

とて耳を切つて投げ出す者が出、はたの
「大事の財産、惜しのこの、大事の財産より命
に過きざる者あるまじ、之を奪へ」
とて腰かき切つて飛しに男さくあらいんに。とこび
武田無衛も
「穴カシこの者ともや、帰り上つて又酒飲む
事も有り難し、者共も奪去さん」
とて自宅に。こゝに家主の男こんを見て、我一人生き
残らじ、六浅羅く召出さん。安穏するまじと思ひ、家を
火をかけ、炎の中へ飛入つて自殺せり。

以上の如き事実が果してあつたかどうか知らないが、あの
改の氣風の一端い描かれたものであらうと見てよからう。斯
る士風が徳川期のそうでも侍日い勿論[illegible]斬人の血
でも浸潤して使茶の如きふものを出し[illegible]その中に使ても偶
然とは思はれない。

(所蔵者編集本部記録)

8

田中正平博士の料理

前月石川千代松博士の追悼会のあつた時、四五の同窓が落ち合つた、其中に田中館、田中二博士もあた。食卓ぢかい隣接してゐたので、勝手な話が出来た。田中館博士がメートルを、ちがへて、外国の下痢で主婦の老婆に恐れをなしたおかしかつたが、田中館博士の料理法に感服を解いた。田中博士は進化論を通り三年大学を卒業すると洋行して十三年も伯林にゐて、音楽の大発明をやつたが、七十三年間は随分つらかつたと話り、毎日の西洋料理に飽き果て、時々は日本料理を

自分で試みた。[illegible]

或る時、某[illegible]日本の大官[illegible]（某公使館より見）

日本食を[illegible]ることのつて、自分が料理番をつとめ（つまり丹時の料理の[illegible]）魚の蒲焼[illegible]実に自分に荷が重過きたが、どうやらお茶を濁した。田中は料理が上手だと評判（さぞ、丹後外四の[illegible]）

某紳士夫妻を[illegible]館に招いた時も、客が特に蒲焼の注文が出たので、亦自分（田中）が脱を揮ふことになつた。自分は臺所でのらくらの饌を迫上げる[illegible]、眼に釘を折つて、いざ[illegible]刀を以つて肉を平ざかんとする時、自分の背後に悲鳴が起つたのは、驚いた

（実如）

振り向くと、紳士の婦人が見物に来てゐて、眼に釘を刺つたのを見て驚いたのであることが知れたが、北の夫人は後に、「田中と云ふ人は文化的の魯人だと少へてゐたのに案外野蛮だ」と評した。人の話つたはとつき一笑したと話つた。

新年に際して餅が喰たくなつて、在外日本人が公使館でいろ〳〵相談したが、何分共、涙の餅米は無かつた。米と云へば南京米のあれは手に入らずやつとのことで日本米を手に入れたが、さて之を搗くに臼も杵も無く、銘々が手で鍬りつぶして、怪しげな餅を作つたことがあると話も出た。

石川侍士と猿

前項と同じく席上林権助氏の石川侍士に対する追想談は簡潔で頗る要を得、外交家[illegible]風格[illegible]

林氏云く

（九、流れに　いうまいか）

私が外国の大使としてあた頃、石川君は訪ねて来られたその時相撲くて教果し、動物園の猿の話をされ、猿の長る檻外を立つたと、猿の自分に対し頗る不孫の態度であつたが、石川君が現はれると急に[illegible]様子が改まり、先から故人なども含し[illegible]親しみのある態度のうれしかつたと

（やうな）

（感心させられた）

（自分も）

12

選挙三要

戦(ル)ん選挙の要訣を説くこと如何ある時は曰く「カバン」二
曰く「地の利(バン)」(選)三曰く「カンバン」(看板)と、
如何さまざまの選挙けれども、畢竟勝敗は全く
繋つて此の三訣にあるのみ、中にも勝敗の決を握
るものは才一とす、すべからく人は投票の交換券は此
中にあるべからず。

未来の鳥魚

霊知霊能の人間が鳥や魚を学んで出蓋の名を博さ
んとし鳥の真似をして成功し其の飛翔の安逸
と速力の迅速い迄うん鳥を凌駕するを至つたが
魚を学ぶ潜水艦い未だ魚を凌ぐ迄うん成功しうる
の分艦内が充満居て陰賛ひるるを西洋人の如
き長幹肥満の人間い之れを厭忌みるを反し日本人
身躯が矮躯であるのみならず伸縮自在の手足を有し
魚を学ぶ高い迄もなるべし西洋ぶい志きるに

始末をかくんとし、いつの軍艦今濃でも◎枝等い潜み艦
の廃止も主張しても[illegible]かいこんな共通[illegible]
[illegible]は出華の[illegible]は鳥の真似のやう
し成功し、逸の如く方向を[illegible]ら動ん進退し、推機自在
又潜式しも勝手ん深さ[illegible]潜水艦の操縦で
どんなの早くも達走セ得るやうに[illegible]が言い
得ると。飛行機でとも其の成功を収めたのはツイ大数
後の事で、工風に工風を積んで後が如くとうるひいちい
が、魚も[illegible]恐らく今後二三十年を待つ[illegible]
らう。達觀すんば今後の戦争は◎鳥逸の戦争で

海洋を渡り艦艇の潜水[illegible]主力を失ふことをうたひあらう。

本が[illegible]と今後[illegible]極力[illegible]注ぐべきは、通れ[illegible]ことである

(防衛研究所戦史部所蔵)

都会の蕎麦術

何でも熟すれば人間業を離れて神に入ることも云い得る。丸ビル附近で毎日見る所の蕎麦屋の仕用人が自転車に乗り蕎麦を運ぶさまは[illegible]いつも出来もして行き渡セーめる。一枚の盆に二十箱程ののへぎを載せ、其の頂辺に汁の徳利を三つ四つ積んで、立ちも落ちもせずに安くと運ぶさまは、正に一種の蕎麦術であるも、又或る喫茶店で感じたのは、四洗ひの敏速で且つ巧みであることである。十六枚の皿を一度に洗ひ、湯から掴み出し、それを前掛で指に挿み、順次に布巾で拭き清めることの早さ、看るく二三十枚の皿を手の動作に拭き終つた。

宿の菓子屋の[illegible]の[illegible]石鍋で飴を切つてゐる家があ
る、俺のやうに長く仲べる飴をトン〳〵と庖丁で切る
ことの早さ、おのづから柏[illegible]子が立つて手中まで尺
度があるかのやうに切られた飴[illegible]大小の不同がない。
年 [illegible]北海道のビール会社化[illegible]香[illegible]を敏
感する一婦人がある。髮百本の[illegible]空ビンの集さ
つてゐる所へ[illegible]、善[illegible]は一ダビンを取つて石油
などの香[illegible]のするのを取りうるのとかの北の婦人は其
場を臨ちと、どんかんと指摘[illegible]面[illegible]中するのに感
る術があるとの此の又鮫を握ることも巧拙があつ
て、江戸兒は鮫を氣で握つて氣で咬ふこまかなるど
ころをみるが、北握りの氣[illegible]相南の修業を[illegible]
する処これ北道の天才とする[illegible]年が三年の[illegible]

某鮫屋の長り、食通は[illegible]後生恐るべしと云てゐる。

丙子老録（四）

紅霞

自分の書斎を兼行に坐敷[illegible]の入口に紅霞山房の四字額をかけて居る。こゝに故人となった[illegible]と演村花六の[illegible]毫しに家字[illegible]の平生を知る人が訪ひ来つた時、此額を見て如何さまこゝハ[illegible]と云ふを酒客の看板だとこゝろ[illegible]おかしくなることを聞き答めた所、紅霞ハ[illegible]酡と同じく酒の異名だとこゝろ[illegible]自分ハ始めて之れを知つた。実ハ紅霞ハ[illegible]印の異名であるので、自分が[illegible]印を多く蒐集した際、之れを堂号[illegible]つ名づけ[illegible]尚[illegible]と自分ハ一笑した。

酒[illegible]誡と称し、酒を誡めるの意味を表ハす各国に種々あるが、実ハ餘り感服するものゝ無い。但し西洋の諺

ホ

ハ新しいのがある。海中にも杯中に溜る多い（グ）

ヒとふるとハ、陳奏を先かめた酒蔵と感し

ハ酒の頌する西洋の[illegible]おもーろ[illegible]味が

ある。偶ま芳井[illegible]文学博士の諸の研究を見

ると、「土地を買へば石も買ふ、肉を買へば骨も

買ふ、卵を買へば殻も買ふ、よい酒はかういふ

外がうのことをいふのハ、酒の頌として新味を覚

へる。

線美

同じく線でありても味のあるのと無いのがある。味のあ

るのが藝術像である。輾轉

で作つた器物は主流を円形

にするがウて味が無い。名人が輾轉を使ふ時、手づ

く作つた器物は楕円形でいふのが、其の線

如何ともいい難い味がある。丸竟線に作家の精神が打ち込んでいるからかも知れない。作家は話きたる時の感興で或る線を作り出すのだ、之れを再び繰り返すことの出来ない線である。茶人の童人する線に所様ものがある。我邦の書の指も意に於ても線が藝術的のことさえもある。平假名若もどい線のさまざまの姿を現わしたるものである。

〜と連なるさま、或は墨色の濃く或は淡く、字が或は大きく或は小さく、長く旋ゆく錯綜の間に趣を為す線の趣がある。道風や貫之や公任や行成の作る線が何故持囃されるかと云へば、美しい藝術的であるからである。偉かれ一本の線、竪の横の横、えを引くなり。筆者の巧拙が判せらるゝと云ふ迄に、線が生き

とあるのは絵画界でよく云くことばであの人はよい線の持主だ、などいふ、とんは外国まは無いことだある。日本画の根本は線にあるとも云ふべきだ。昔の美人絵は未だ、線のウマ味が画の七八分の成功を収めるまでである。浪華山の線は強烈日ならんばかりの西家が模倣を試みたいのも其の点にあること勿論疑ふ。

[illegible]

西洋の線は機械的で一般的であるかく敷き心はあつても、ウマ味がない。骨ボリつて丸みがない、風氣が缺けて[illegible]ナヤかさがない。クレルフルの変かさへのが西洋の線の缺点であらう。我邦の紙や舞踊が、西洋より較べて情味のあるのは、線が養術的であるからのことだ。

必竟

俳人の洋行

俳人高濱虚子が外国へ漫游するので出発前のラジオ放送を聴くと、我邦の俳句は日本特有のものである、又外国詩人の作る俳句は、現在外国の行はれてゐることを、自から外国の拙なる所為とし、人も感得し難い為めとあるが抵抗する短詩形の美を日本俳句にもとめるが抵抗先らずと評し、外国では我邦の如く四季とさまざまの気候がなく、赤土の新々の風物や倉皇として暇がなく、雪の節をあらはす詩を作ることは出来ないと云ふ此の霊子がどんな研究を遂げて帰るか他日の徴する外無いが、蒙里の天涯で日本俳句を宣伝することも一興であらう。

尾崎紅葉などは獨乙に出厳谷小波が出かけてゐた時、去きりに滞獨中俳諧で大気焔を揚げよ、吾々若し外国の在らば到る處大理石の句碑を建て芭蕉に倣と勧め。

ムベキカトイヘバ、●美ハ空威張デアルカラ。今度ノ空子ノ行ヒハ、大理石ノ句碑ト違ヒ、外国詩人ニ日本俳諧ノ真味ヲ理解セシメ[illegible]ル実理ヲ[illegible]

風月の欲有情

妙風景ノ変化ハ俗情多シ」と[illegible]瀬旭荘ノ句ハ、よく実際ヲ穿ツモノデ、大概寺ハ絶景ノ変ヲアラハシ、僧達ハ風流気ガ微塵モナク、絶景ヲ[illegible]ラ無神経ノ日ヲ送ル。アタカモ絶景ヲ刺却シタルガ如ク、[illegible]ル却テ百里ノ外ニ[illegible]ル北ノ●[illegible]ヲ[illegible]ト云フモノガ●[illegible]ク●絶景ノ徒輩ヒトシカラヘ。エマーソンノ法[illegible]風景ヲ真ニ愛スルコトハ其風ノ象徴ノ所有者ヒアルコトヲ知ル。風●ノ美ハ事実社会ノ観賞者ノ欲望ガアルト云

（愛する者が掌握するのだ）

西方が本當にあるとか、愛の無いすべて真の領有は無い。寺は限りなき多くの風景に對する領有權は、祝福する家の共有である。風月を賦して愛情の情を注ぐのも、領有を滿たし心地とする。風景に對する領有も又

（終驗祭）

我邦は交通歴史を考へる時に、吾等はいつも佛像が深山峻嶺を平地のごと往来したことや、寺を建て未拓の地を搜ひ出したことや、道（ちきの道）をつけ橋ちき所に橋を架し苦勞を想ひ到らざるを得ない。佛像の

四国山伏と呼ぶようになった。殊に山野開拓（道路開通）に功があつた。役小角がいつもうたてあつた。其の代表者として役小角が開拓者である。けれども、山伏の創祖である。小角は実際山岳開拓者である。小角の事蹟が歌舞伎になるまでの之れを創祖と考へるようになつた。全体此の宗教は普通修験道と云はれ、或は雑宗と称せられてゐる。此の雑教の宗教の思想が取り入れてゐる。此れは我国固有の神祇信仰、支那の道教思想が折衷してゐる。全く日本の創造である。此の宗教はいろ〳〵日本の好尚に応ずるやうに工夫さるゝ点に云い得る。其の雑駁であるので是れ見日本にアダプトするやうにしかゝるものであらう。日本は山国であるから山岳崇拝思想がある。山岳を祀つた者が又山岳を神聖視もする。仏界を超越した無上の清浄地は山岳と信ぜられ

神仏の為めの好奇心)也とさん、支那の神仙思想も奏功し、
深山幽谷に仙人が居ると信ずる所を
[illegible]峻山高嶺道[illegible]
行くの[illegible]鍛錬法とさん、飛騨に於ける、苦行を
始め種々に附い、雷雨を凌ぐことが心身を鍛ること
の利用さんなる。末世の僧侶が例くれけても戦慄するは
どうことを実践躬行したるに、信仰と一般の情し
[illegible]無理[illegible]。伐著の山中生活の仙人のごく
身体を拵らし、其の動作を鳥のごく軽くしたるに、天狗
の伝説を生ずるに至つた。彼等の開徒である上に武装
せし[illegible]、こんな戦国時代の傭兵を思い出さしめるが、山中
に野宿し猛獣を防ぐために斬る武装も必要であつた。
此の心身共に超人に近づいたものが山野跋渉を事とし
のたたるに後世まで伝はけず

喜怒を鐘に托す

私は鐘彫る趣味を感じて[illegible]耶が書のいたことしあるが、西洋の鐘と[illegible]興味のあることがうかがはれ、考へるに、モーパッサンの短篇に高山説を読んだ僅かに一つと得た。仏蘭西が墺軍の為めに敗れ、或る地点が敵の為めに占領せられんとし、その地にある仏[illegible]数寺の礼拝堂が鐘を鳴さるるに及び、[illegible]が不便でもあるので占領軍が種々鐘を鳴らせと交渉したが何人としても應じない。[illegible]占領軍の士官が徒然を慰める為め仏の婦人教名を召して酒宴を[illegible]熱狂させた時、一人の士官が粗暴の言動をなすことが婦人[illegible]の敵愾心を鼓舞した士官の刺殺され、其の婦人は直ちに捕へられ、遂に銃殺の刑に処せられた。其女を捕へ得

に残つたびあらうことを抜けれ、こんと思ひと今日登山を起寝としてゐることの八、[redacted]先輩の労苦を[redacted]に思ひ到り、修験者の著わす盛んな祭典を行ふことがあつてもよいと思ひ、未だ嘗つて全てを多かるから、私は之れを提唱する。

[illegible]が扨て利々丸比士宜の責瀬を教會で
葬るれつき、若し此場合に於ても教會が鐘を鳴らす
ことを拒む者あらば、それを理由として[illegible]の孔拜堂
を破壊すべしとかゝる意を決して[illegible]発信を二度に
と、教會へ注文[illegible]と特別[illegible]
らしたとこゝのが此[illegible]婦人[illegible]鐘を打鳴
[illegible]の筋[illegible]
[illegible]鐘を[illegible]
鳴さず、後の敵が死人[illegible]怒りを[illegible]鐘を鳴らして
慶意を表[illegible]所の[illegible]
[illegible]庵[illegible]此娼婦は鐘楼の中に潜み、孔平くさ
[illegible]中で四度迄悔つたが、北の意[illegible]行為が神罰とな
つて、或る夜四方の高とろうかと[illegible]。

えい鐘を托して[illegible]を現[illegible]

西子書話（二）

良毒

西洋の諺に「無毒に次いで良毒」と云ふのがある。こんハ言ひ換へんに無毒の方がよい、強て毒を持たと云ひ
良毒を持ちたいと云ふのだ、随分の苦しい言ひ草
だ。[illegible]人事の大切と[illegible]法然を
否認なんとしてゐる、えんで伝つて西洋人が如何に細君を困
つたものか想像される。[illegible]
全体良毒いどんなものか、[illegible]ある人の云く毒
ハ愚なる限り悪毒と良毒とがあること、えんも愚なる
所がまつて云ふことだ、悪い良毒の條件は、賢くなり
たい良毒なるを失いまへ。良人をよく理解し良人と琴
瑟和するものあれば、悪毒（良毒）であるが、充分悪毒
ハ良人を蔑視し、[illegible]殿を無視しなくしたの様を装ふ[illegible]

跳鹿跳梁、仕方なきこと所から、宵々あるべきこと荒かせの
歎聲を発せしめたるなり、飛国名貿易商人と云ふ一種の
婦人があり、つて良家婦人を誘いたるあるが、驚
敬しきいと、西洋の諸が日本なる型言と[redacted]こと、
うしろうろう。

川柳の碑

観桜がてら墨堤に散策し三圍の社の境内に入って見ると「世川柳の句碑がある。そこに「つもらぬといふいちいさるの速達」の句が刻してある。えゝ川柳の辞世であるうどうかも知らないが三圍の因人が句を思れて、卒然読むと川柳式の軽味もあるが、一向つまらぬ、凡作だなぜ碑を刻したかと怪しむ。再考するとなるほど含蓄がある。何かかもつまらんやつ世の中の経験を無意識に織込んだ句だ。智眼をもつてこんを見ると何かかもおもしろい。川柳氏らしい世間通の着眼しかも一向板着いさつを取り上げ題材とする。そこに本欲があるのだ。今句は決して平凡でなく川柳氏の本欲と道破したものと思はる。

日誌

私の長い間日誌を書く習慣がありまして、若い頃から今日まで続いてゐる。何人の用にも[illegible]ないかと思ふと嬉しいことが出来ない。日誌を書き始めた時、某紙舗の雇人の罪紙本を用ひたのが[illegible]例として、幾十年も同じ日トジ本を毎年二冊づつ求めてゐる。初め本の体裁も大小も[illegible]幾年経つと変更がなく、百冊を移す累積となる事迄の狂ひがないものの揃状況が、年を経て往ひ紙質が多少落ちてくる。其の価格は例へば僅か昂きも、当初廿五銭位であつたのが、二回五十銭と[illegible]まで昂騰した。自分は[illegible]形を同じいものを[illegible]用ひ[illegible]使ふ欲する所から僅に差としてあるが、一冊小形のトジ本を二回上十銭で買ふ事出来る世間を餘り多くないものを見て、昨年頃から此トジ本は絶た。自分は四十餘年例として元を用ひ来つたのを、[illegible]えんが手を入れられて、不便を感じ[illegible]ひたが、去年[illegible]四十餘年[illegible]慣[illegible]

紙舗[illegible]同じ[illegible]

（持続の）

り、紙鋪と自分が競争をしたとゐると、自分は紙鋪の勝つたやうな氣がした。何となく愉快な感じだ。

自分は右のこと〻（）の冊子を日誌[illegible]使用し来たつたが、世間の[illegible]作品をみる者黄の日誌を選つたことも[illegible]、[illegible]を氣をつけて見たことも無つたが、或る日の書お遊さん書[illegible]の店頭に待つてゐる日誌を見て懐郷[illegible]た。[illegible]は種

[illegible]数の如何にも多いことに驚いた。[illegible]の日誌が[illegible]

[illegible]つて[illegible]へたことがあつたが、[illegible]氏の日誌の撮影に一度[illegible]

[illegible]去木をみたる図）をそうつたのが、今は[illegible]方面に

[illegible]庭でまん〻の日記が出来てゐる。鑒山家、スキーヤー、[illegible]

[illegible]採集家、映画家、[illegible]

等[illegible]芸術家[illegible]神経、[illegible]スポルツ等々

[illegible]再の日誌が[illegible]、記入の諸欄もまん〻[illegible]

[illegible]。尚[illegible]者）の日誌も書き込（）欄が細かい[illegible]

[illegible]さ[illegible]

[illegible]、こん等も

二三念入の工作の
詳しさを挙

日誌を書く前に、要件を先づメモする
略記する習慣があり、それを切り取つて出
来るメモの添つたものがある

挙げることを煩瑣に堪へない如く、今日と昨年
とさへ三ヶ年間の毎日を比較したのさへある。常に努力を
入つたのは日誌に鉄を紫黒に塗つてあるのを認めたことさへ
て工風を工風を重ね、調法からくる新案（のあるものさへも）の形態を
受つた結果は、毎日の頁を訪問、喜劇の性質、広告事
故、其の日の重要な事件、貸借勘定等の諸欄が備
つてゐるものを見て、日誌を母書
く習慣が各方面に起りてゐる反映かと思ふと共に
かしくも感じたが、実に自分の実験から言ふと多くの
日誌に工風された工作が案外多くを失して却つて使用する不
使てあるかと思はれた。いくら調法から
と案出した特定の諸欄は実地と往々常に相即されない、何故
書かずに仕舞ふので、諸欄で紙幅を狭めるより
紙幅の余地の多いのを喜こぶのが実際であつて、自

今日のことを比較したのがある、甚

記入

四日記などを書くのが却つて用ひられたのである。こんな雑項を諸
機に置かず勝手に書かせる趣向は何人の工夫かもしれない
ようだが、実際の用にたゝる限りの多くの日誌は意匠
倒なものである。但し或る特殊の芸術的目的
を計画する日誌は、太古よりの必要の書已機の買ひ
とみるべき此限りでない。昔一の四日誌を書く人が罫紙を
与へたことがあると見通しの面が書けるといふから面
の書ける人の日誌例へば海老名弾正先生の年山とか八無界の前
業を用ひ[illegible]

[illegible]

[illegible]新しくよみをよくしない。[illegible]複雑になると、たゞきれ
の黄無性の[illegible]折角志した[illegible]種かんつかり日誌をつけるの
日誌を[illegible]奨励の[illegible]
ことが却つて目的の[illegible]工作を来す

S

畫幅の格好

近来の畫家が展覽会などに出す作品を見ると、在来の型を破る、斬新なる畫幅のすべてを立て、衝立や神社の絵馬額などもあることとまた格好のこと、横が長く、縦が短く、縦が長く、横が短く、ナニナ形の作品などを書いて、概して型が一定せず、々西方形に近くなりつゝあるが、現在の日本家屋に入れるとどう取扱ふか、充分考へるべき西洋畫を嫌うと仕出し家するときに困ることがあるが、こんな畫家と云ひたいこと、自由な考へ方と都合のよい形式と云ふてゐる、平福百穂の好意

（附記）かくの如き方形が作られる様になる理由は、七とり一様でいはゞ、西洋畫が方形の畫面を採用してゐるといふことも日本畫の方形となるべきを直接の影響があるやうに思はれる。又畫面の

小説

家

大きくなると、畫面の形は自然と方形に近くなる。
かしその重なる理由は、畫面が著しく寫生的になり、
ことである。自然の對象を寫生的に表態度で、自然の
一部を截り取ることを畫面にもとめるようになると、
方形は尤も便宜な形である。もしその幅が上下に長
いと畫面を餘白が多くなるので、それを埋めるように
これも無理が出来る。この畫面の束縛を脱しても自由な
自然形と共倣れ畫面をもとめると、方形或いはそれに近
い形が最も便宜であることと、
桜井氏徳の朝の化粧度并に女性の所謂る行燈形
の畫幅が行はれた。これは方形といえないが、上部を切
りつめたものである。この形が書畫界を始めとして
もそれいが、それらも更に切りつめたものが西洋畫家に表ば
さいやうなものの家屋の裝具はなることと全く慶外

白紙

し指いれ仕打とでもいふべきか。全体書幅の形は縦の長さ、
茶人の幅の茶室の床が低いさに比べ断簡零紙などを表装するのに幅の形が小さい。廊下を置き花
瓶や香炉を置く所が多く、横幅が茶室などに多く
用ひられる。南書を表こぶやうに長條幅が行はれ。幅が狭い割合に竪が長いのが格好がよいと今
は書画屋は幾パーセントかの多くの優を附するが、これも其内
に変化するであらう。現代南書も漸やく書
餘白の多いのに用ひられる。赤かい山みを
描くに餘白をのこさず書き埋めるのは面白い工風で
西洋画に多い。表装にあるこれを就て百徳の云く、
東洋の書画が正方形でなく、著しく長幅であるは、
横巻にあつらへるのは、これ以外の理由があるか。東洋
の山水画は巻の中に住居具の観る心持で画くやうに

といふことは、既に宋代から注意されて居る。自然と画趣する心持で、山水画を描くことがあるとすれば、西洋の風景画のやうに、一画面一視點のものとすれば、その視點は画面の中を道に沿ひ或は川を沿つて動き行く筈である。視點がかくの如く動いて自然と画面の上下に長くなるべ

あらうなら

一画面一視點の西洋画が果して東洋画と異なるかどうかの研究を要することは此の視點の動く画中に動くのは南画の心髄の繋る所で一概に之を排斥することは出来ない、南画にも日本画にもあるとは云へ、背景を観者の想像に委ねる點は、東洋画家主義の為めに敬慎さるべきことであらうと思ふ。

園丁

起

自分の前年郊外に別宅の地を卜した時、そこに自分流儀の庭を作って見ようと思って無謀な考を興し、有り合せの樹木でいろ〳〵試みたが、迚も思ひやられ行かないのでさう〳〵作庭のむづかしいことを感じた。今の宅を定めてから年に二度位は必ず園丁が来ることの一入やつてくる、その時分庭の模様替をやることもあるが、園丁の新道の修養がないからだけに、到底自分の及ばぬと感じたと云(ふ)美は当然思されると当然だと人は笑ふが、実は多分眼中描く所があるのだと云ふ。如何に行はんとすると、一木一石と雖も自分の意の如くならないのは。然るに情けない。そこで園丁を相談をかけて、役者をつかひ、自分の胸中の案をつたへ、自分のこんなと園丁に敬意を払ふことを忘れないのと。通例どこの

庭を眺めると休憩するのは甚だ
の家の主人が他の労働者と較べて緩
慢があるが、実は園丁の喫煙しうる
必ずしも逆に会うのではなく其の喫煙しうる
ら様な恐つた時が来て伐採の思想を錯まつてゐる
時は例へば一石をすくうとも、どこれ置くべきか、如何なる高
い石の面をあくまでまぐき数等この休憩しつゝある間
をくい決するのは必ずしもツルケイ時を働むへむいない
すべて精神的の工夫を要する労働まい多少考慮の餘
地が無いのである。作庭は実は画を心とし一般、一枝を
おろすにも樹の風姿如何と葉一枚をもおろそかにならぬ伐採べ
時に触れて画家の筆を握つて楽しまるのと
一般であることは庭師が知らぬ伐採等に多少の教養を積ふこ
とが必然であるやうに思ふ。

庭を眺めると休憩するのは甚だ

雨平叟録（六）

5 慢心

慢心ほど人の悪徳でない。誠に高慢の花は悪魔の庭で咲くとあるが、実に好箴言である。

全体慢心は利巧の人に少なく、慢心家は大概愚物である。馬鹿と高慢は同根から生ずと云のかもしれぬ。さまで見事合ひもあるが、或は云へば自慢は馬鹿の行どまりで、展開の一歩から云へば。自慢が美かつたくらと死滅が近うの。蟻ほどの羽が生へると共、姿は傲慢、豪勢れが何もろくに死ぬ位いうのか。老子は言ふに、自から矜らざる故に長ずと、矜るとあるから近歩から。若い人は慢心故に戒めらんとあるが、実は自家の慢心を自身の知らない人が多い。自家の慢心を棚へ上げて他人の高慢を指弾する人がある。それも前程自家の慢気

見ずや稲の実の満ちるに頭を低くしてゆけ、実

なきの昔光頭を擡げ始るまで。

を切るい、時雨里地の上を走る蟻を見るも難いと
[illegible]折り人の言ふ[illegible]が至言ひとある。

5 和歌の[illegible]漫談

大隈言道の歌に「はきだめの塵の下なる芋すらも子
い親にこそつきとなりけれ」とあるのは人の注意を惹す
る物を捉へた所に慧眼もあるが、倫常の至理を
富士に所に[illegible]味がある。かかるの子代の句に「手に
ろし垣根を倒す霜かな」とあるは思を仇で返すや
うにも解さんとが、生育の力の大なる青年の後世恐
るべき[illegible]意を富士にあらしめ解し
得らるゝ。我邦の道歌は卑俗との感無きを失する
のみ、歌人に忌まれんとか北二首らどは日三流の道歌
で教訓を宛しうしうる[illegible]卑俗に陥らるゝ所に明が
ある。[illegible]蓬寺の句に「無用の書紙魚食い
[illegible]」とあるは乱雑なる図書界を風
[illegible]ようそびと都かるるかきつばた」は田湯

[illegible]夫婦喜ぶ[illegible]の形容を見るべし。

△川柳（子の）「俗名を呼ぐば薬種は安くなる」と、豈啻薬種のみならんや、萬事（誰れでも口のすること）を羅甸語で云へば、[illegible]と傾聽するか、日本よりも羅甸語の死語を使ふことの大馬鹿である。西洋でも羅甸語を知らぬものは、かいまぐ馬鹿である。いと怨しとする。我國で先生と呼ばれる程の馬鹿ぐらいと同一意味である。

5

芸名

芸者が或る種の発明をすると、其芸者の名を冠した品の名とすることが芸界の通例となつてゐる。こんな場合の名誉を表彰することは、芸者の異なる動機を奔いらるゝものである。もんが幾つもく(或)芸者の名を呼ぶことがあるのは、其の芸者の名誉となる譯だが、此の名の附け親の由つて名誉を高[illegible]等級がある。若し[illegible]芸界の大家[illegible]が名づけ親であれば、其名誉も高いが、[illegible]が名づけ親であれば、軽人せらるゝ。[illegible]元から某大国の勲章が誇りとなるに反して、芸者国の勲章が恥辱となるのと一般で、芸名のつけ親が淫婦であつたり、[illegible]故[illegible]である。偶々兵隊次郎博士の陸軍を侮んじたこと、博士が芸見しれ種名れ

丘の名が附されてあるのが、セウあるところだが、それが、世界の学界の大家が命じた名だとあつて、侍士は左の如くこれあるが、種々に自分の名の附いて居ることを得意とする人があるとすれば、その人に対して、私は戯れに、僕のは悪く細工の上等品はありて、安つぽい和製のことを言へば、いとこやる積りである」と

5

銀座サロン

去る四月中銀座の漫歩を試みると、商店のショウウヰンドウに洋画の額面が飾つてあるのは、何人の気をもつて見ても歩ついたが、どこの商店の家も一枚乃至二三枚の額面があるのみ無かつたことと、文展に入選の洋画家が展覧の賞を得ず、銀座各商店の後援で斯くしたのであると分つた。斯る事は家業が

（初めてこと一時の

らゐ瓜しるのもあるようが、よい瓜であると思ふ。飾り窓
うい種々の高品が置かんとある。かく、ところ額面が充
ハ商品も発揮する。額面自分一杯に置かるべき所
を得た趣がある。文展の分場ちがいで、実十枚の式百
枚を並べて丈間々間隔もないから、各個の画が互ひに殺
し合つて一向に発揮しないが、ここは各店の看板独占
して掲かるべき窓を掲げたあり、発揮つて立ひ
ます。冒すことがないから、額面の仕合で銀は金部
をサロンとして貴い興味を感じた。ある。

5

三圍の川柳

墨堤の三圍社に女角の祈雨の句があるが、川柳子ハ之れを能くも解し何百と云ふ句を添へてゐるが多くハ女角を嘲るあれど句の中に秀句もあるが、女角をあしざまに罵つれ句いろいかと、可哀相なる。そも女芸降雨の為めに迷惑したことのあるを云くば、女角をあしざまに云ふのハ道理であつて、川柳子本領いろめるよ

[illegible]

三圍の手柄小貴い二合さげ

米屋から云くば米價が二合下つれと芸術がある

あのツクニフが女角かと米屋共

かく米屋ハ女角を罵つてゐる。米屋はかうひそく

91

を食とする一郎も喜ぶ

世角の句宿るしばらく悪くいひ

[illegible]前方面の門弟子が減のたとえあるは皮肉ひなる

多元[illegible]前の弟子五人減り

他の芸術あるとする瓦師や花物を作る海世のよるとび

[illegible]ある

掛干や干瓢の邪魔世角する

掛よ干瓢をと中の郷大塚を

見入れ両比と瓦師八田つとみる。

5

葉がくれ

葉隠、鍋島論語かまこと世の中より出さんとのこと。此書は山本常朝の説を中心とし、武士道の極致を説きたる作品なり。葉隠の本書は佐賀藩士の手にて、葉隠の書名は、淡々たるいとなれども、無数の遺念和歌の殿様名歌なる四書きとなる。

武士道とは、忠と孝とを片荷にしたる、二つ時中、肩の割入る程荷の重さ。

哀れ、侍は主つかう、朝夕の御礼、行住坐臥、厳粛にくしと唱へべし、仏名真言は少しも遠いさるべし。

と、簡単なる一葉隠説をなす。鍋島侍の名称は殿様中心主義で、此主義の事を踏んで利害を顧みずして武士道に死ぬこの性

ひとりけんかをしぬと話くらとある。言は甚だ之の稿の如くであるが、打算は常に常と相違する。

一回の死は、あれは、決死の覚悟をもとと云ふのも武士道の才一義とするからである。私は前弾に江戸の使の伝使の源を尋ねて源平盛衰記を引用した事を記すが、侍の送別会のことを日本[illegible]が、葉隠にも似寄りの左の挿話がある。

江戸で旗本四五人が夜会を催ふした。一人が便所へ立つた。其後で口論が勃発した。一人が切られた時燈が消へた。便所からさきの男が馳せ来して、「殺しつまらうとくん、何んぞもろいのは、早く燈をと云へと。再び燈がつき人々が駆けつけた。便所から出た男は、さつき人を切つた者の首をづばりと抜き打ちざまに切つて落したとある。あつと驚くろいたが

（二宮ちよ）

下手人の立ちまい、千代冠を見ばなされし拍子、喧嘩の場にあらざるを以て為さず、隠密者といはん、切腹の極つとなる。

便所へ迎ひに来たりと云へんとせしに、離れ云来ぬし、いつぬにしても腹の切らるべきを場合に狩り恥をかいて死ぬるいと考へたるに、相手を殺しれのみと言う此

隠密と云いつることなれば恥辱なれこうを語る様流しあるべし。此事件は将軍の耳へ入るべ（お咎め）

ちよつとと附記されたものなる。（つもり）

面白い趣味の書

外国の輝流で自分ののもちこぶやうな趣味談は日あつたる毎に北欧日ある雑誌でそれ一話が締めて今心を受くしめた。見た米の前大統領ルーズウエルトと英の故外相グレー子爵との間に起つた話味談である。ルーズウエルトは大統領を罷めて亜米利加日郷子狩をしたを[illegible]深海の金次英国を[illegible]河口の小島を見たいと、英国に[illegible]の事を英国に[illegible]此所、当時外相であつたグレー子爵が[illegible]者に別に物色[illegible]自分が[illegible]日[illegible]すると言つた。実はグレー外相の趣味の人で、釣の名人であることは隠れなきが、小鳥[illegible]就ても国[illegible]門家[illegible]の迷信が自深かつた。子爵が自信があつて案内と引受けたが実はお客のルーズウエルトはどれもちどめ鉛筆があるかを測しの為

孤独。益々ルースウヰルトが英国へ渡ると、此お客の百〇抗中一小禽研究を忘れず、一日約の如く、グレーチが先導して或る田舎を見ようとのことの勿論二人の従者を伴なはんとの心配。グレーチは途中お客れ退屈を来しいまはしめ、費しれが、遂に鳥影を認めるや、お客に告げて、ルースウヰルトは鳥の歌を学ぶ。鳥に就ていあらゆることを談話まもつてあるのびグレーチを教のかしれ。ルースウヰルトは鳥の歌を学ぶ。不思議な事の所有者なれ、三四の鳥が一緒に歌つても、一々其を區別することが出来、初めて知つた鳥ばかり其形を学ぶことが何人であるかと云ひ言う位敏捷い。ルースウヰルトの耳目を感服させた。この鳥英国ひい大きまむ珍重しうるものである。

そんを大いな価値のもの。

歌がうまいとうめてこんな折紙をつけた政界の
両雄が全く政治を離れて別天地に一日抜味の楽しい
をしたことは歌例のない出来事で、為人は帰金に
あれに浸つてゐる道路をツボンをまくり勝まで
達する水を渉つたりとの椅子もあつたが、グレー
子爵は日米国の新しい時、ルーズベルトの田舎ハーバ
ート大学の講演を頼まれた時、此時の事を説いた
とあるが、誠に興味ある両雄の逸話である。

のである。

丙子夜話（七）

春城生

馬琴の秘話

和田嵩長博士が精根を凝して畢見八犬傳の評釋が漸やく完成せんとする頃、私は之れを翻讀中（えんまで知らざりしこと）二件を知り得た。其一は馬琴が著述（始めはやがてこと）を白狀したことと、和田博士に左の如く云ふあること。

（前略）彼の生涯讀書を好んだけれども著述の嫌ひであるを自狀したるが、彼の著作は單れ糊口の料を得る手段にすぎざりしことを云ふ。（略）つゞ知己に與へた書信にいやがる著述にかゝる後

2

バ「ぐぐ」とかて獨と春ハ且暮に美文候」とかいふ
歎きを絶叫に発見する。殊に老素寓作を俗な
ぜうんちうもかくハかくく憂き味を味つて天
保小年の藍村氏死書簡に於て苦痛を訴へも
ゐる。
心のすくき時ハ折ハやんかれうさうあれ御座こか、
る折ハ世渡りもんハ捨置かるく種て業とする
候べハ出来の知らきの切論に候へとも内巷を知
らぬ者客ハ面るやかうる眼うを見もいさこうな
る事ハ分ぬ「孔」是ぬ「孔」といはるる事、さりとて思ひや
りなき事とも推へくも世の人へかうる事を
らむいのも光のしるは若未れ敬るうとんと思ひ
さうる結るんハ其の事れ御座候

言つてみるが、剛情我慢の馬琴に此言をきき
[illegible]の如き業病の種も思ひ知らんと一味の哀感を
覚へる。

馬琴が妻の及んでも、[illegible]八犬伝の筆を絶えず、城のお
略を泣かしもせず、口授・筆録せしめて、遂に彼人が出き大部
の著を[illegible]完成したのは、糊口のため止むを得ずして、[illegible]
[illegible]えんを以つて使命とし、[illegible]
近人を思ひ出すのみあつたが、彼[illegible]赤裸の[illegible]を[illegible]
彼人[illegible]も人間であつた。[illegible]外面を粉
飾するを、糊口は[illegible]のみである。斯こ[illegible]
[illegible]の私信を依つて知らるることゝ[illegible]
[illegible]切味を感ずる。
[illegible]自分の寡聞、こんまで書つて[illegible]

4

たのみく説めんとあるを
（前略）路中の孫をまつきいハ大橋が一時繁昌をうらやみ
居噂が喧傳さんとに事ハ勿論虚説もあらんとかに事
の起りハ武悪戯漢が偽書状の偽物を拵へ解
入歩（ハいと事なるものもあるが是ハ流石の馬琴
も驚めし、町奉行所に其真偽を問合セなりし
ゆゑ、
ところも何ぞの手紙なども有る事実ハ自分ハ初耳
なりしなり

5

盤讀の弊

夏今の老儒を入るに時々書名いとくれ疑知が見るるごとく讀んだことのない書を求めて讀むことがある。又曾て讀んだことのある書を更らに讀むことがあるが、其の甚だ稀なが、一旦讀んだものを再讀する。無名なるものが、実に書物の一の人のようなる感を讀んで見るべきものあれば、と言のみ書物の同じく思合の年輩や識見が全く五等(書味)なる。

青年期を一面興と感じうるが、老儒を入るに

本 同感を惹き起すことがある。文三年の話振や

含蓄ある味ある能力の無つた時きに、(歿卒した)讀過

して名著を覚くるいくらもあるさんそう

6

を他日渡んじ、その味を感ずるやうなことが甚だ多い。

実[illegible]年時代の塾後の漢書の一節ひとつ。一遍を

経さんが或る年出来たりうつと校見をするが、一遍渡んじ

ますと兎角再渡を厭ふ、義と共書の真味を知ら

ずんば[illegible]仕舞ふ[illegible]或る書を[illegible]数を缺

[illegible]試のチト[illegible]中学の教師が

生徒を引率して修行に出かけ、史跡を訪

ふことがあるが、生徒は[illegible]備に渡るとく、何等

有形のものを探りたがるらしく、故跡、説明、多数のものを

稗の頭脳に何等の感動をもたらさないとのこと

どもである。本来古人の思想を感ずるよりは、

幼稚の[illegible]兒童の思想を感ずるよりは、

時代の名所旧跡などを巡きんことが、何もとうの昔

に喰ひ飽らさしめるの

7

恰度少年時代に書物を盛漁すると一般、後の為めに寧ろ害を与へる事は論を待たぬ。とうとうもーとうが一切代往歴史とろくと、再歴を繰り返すことの繰り返しである。から、教育は黙と注意を要する。と思ふ。

森立之の事

人の家庭の裏面なるものは容易に知り難く、況んや想像を裏切ることが珍らしくない。森立之と云ふ人の福山藩の醫で、伊津蘭斎や狩谷棭斎との深い関係があり、立之の筆跡を見ること甚だ稀書い棭斎の見給ふ信れ書き、行書い棭斎次上手見らるとまで絶賛した。人の書)書き就て其の校勘や書入

とえども学問識のあるとの聞こえ、好書家にして能書
家である書法の男を知れ渡つてゐる人にあるが其の人
柄はとうと謹り知れて長らへ、此人の妻と為つた婦人の
話れは日を文字きさせると、之の美の時分の忠清
さん(御)も流浪十六年目及人にとあが其屋敷へ
奇妙にあるる芸妓の娼婦と戯れもある為に娼
婦から様ちく衛さ旅さんにこと、が、藩を出こへも其
御と此れと云ふもある。此の長い流浪の間は江戸附近
の活方を漂泊し或る時(法の名)(桂園)旅行と
やのにこともあるとまの主之は美男子型の優男が、家
ら梨園の人のやくがあるとの性来劇を好み
自くも素人芝居をやつれとこあが、どれなどの教師が
あつれが、春雨丈は全く見(ま)からく師匠と前さんも

8

9

秋吉さを新会したと傳くらんをあるる。断片的スケッチすぎと
ゆへても、主之の人とうつを想像したるまゝの人の思
考と賞賛かるが、当時の世相を考へると、こん式のこ
とは敢て無理とまでは言へまい、当時侍人として名の
ある人、柏木が幸い世界の竹枝が有名だが、あの人が私
の御園に来て金吹利用を伝へも高人芝居と言ひ
ことがいつまでも見た彼の吉岡の自白しもあつた。特谷
掘商かさん、ある時仁木隊心を抑へて養者をやつたと
云ふのを聞く。掘商が津軽藩の江戸の留守居役を抑
物を招いた時、咲子侍を比較が、四全侍の主の家を訪
ねて、同を特谷を屋敷に取特役の特谷が閉口した
と言ふ題聞を傳つたのである。江戸吉岡の世相を通じて
男子の後りをもとかく、ひとり森主之を雖

うまも及ぶまい。玄之の手作之も相当学才もあつたかれど、いしても屋で、ある手稿でも決して棄ることがなく、篁翁一粹を満足させたと云ふから、他の推測は難くない。此人の妻は大槻家の女で、竜翁の婦に当る人の良人のシマリ屋で困らせた。良人が殺すまでと反動が然らしめたか、大の酒呑みとなりて親族を困らせたところが、此婦人が大槻家の親族であつた為めに大槻家の遺書の諸大槻家に帰し幸にも散佚をまぬかれ、今日までも大槻文庫に帰したのである。其書目を見ると、玄之や槻斎の贈入本が貴重あるところである。

頼山陽の微瑕

本稿三之の舊稿を繙閲中、アト眼に入つたまゝ、
玄應音義校正と題する二冊の写本は、頼山陽自筆と
注してあることゝ思つたが、自分の不思議の感を抱いた
玄應音義は一切經音義であるが、山陽が斯る佛書
を自写したことがあるかと、其書板を取り出して見つ
たが、乾坤二卷の中、乾坤卷の中ごろから坤卷
全部が山陽の手寫に係るとしても、卷尾の森約之
の方の識語がある。

乾卷大智度論以下此合卷皆頼山陽
子成若在東都之日所傳書者山之[illegible]

約之又識

可知寶龍乎

私の靜かに繙閲したのは、何年か前の事で正格の

12

言もあるが、梅岩や森三之の書に比べても見劣りする
ことやうな直感した。若し湯浅を梅岩と私との
比較することがあつたとすると、私の方が否定されてしまふ
ことを併し相之が湯浅と言いて長ずるのを見ると、まんを信
ずる外いない。山陽の江戸に出る時代に流の生
為めに、えを言葉をやつたことが相之の後輩中
「備書」とあることを知らん。自分の之んを見て一種
の感慨を感じさせられるものがあつた。前年中井
敬所の珍斎の梅岩自分宮の古京遺文の中
に山陽の言葉に、ものが三枚あるのを認めた。此の山陽
の古体の詩の外地のないこのむ、梅岩が隠軒屋
こと言葉に七折、主人の字を手傳つたものも
あらうと想像しもあれが、其時後書をやつた

13

ことが○知れもせんようと、古文書の三枚を(或ハ)貸書し[illegible]

国のことをあらそふ[illegible]も知んぬ。[illegible]山城ようを除く五巻となる[illegible]

念仏の[illegible]いか、[illegible]の微時を渡さうとしたハ誠に[illegible]

[illegible]

14

5

一画家を失ふ

北陸鬼才の一画家信竹竹坡は自分に多大の因縁がある。[illegible]自分が御里の記者の時代に新潟新聞に挿入の新聞を発行し、其の挿絵を横山[illegible]に頼んだ。信竹は雪で出つた。この他日伊藤公から越後の[illegible]と受けたが、其時日露の[illegible]雪の舞台を[illegible]持つて来たのが、第一の竹坡と面識の二十年である。北等三先輩が後を富山縣へ移つた自分が業務[illegible]で[illegible]折富山縣[illegible]出の[illegible]島田春之が、自分と竹坡面識の二人と紹介した。此両人が君と縁故も多く他日画界を去る成す見込と言ふ

15

から長く学資を送ってくれる人の内一人が
死ぬかと云ふから、自分は其人の内竹俣
を学校へ通ふことにしたれば、其人の内竹俣
さうなれば、実に無理もないことなれば、其が実行が出来
輝徳を書いて、あの収入もあつたから、其を
学校へ通ふあるいは
業をさせる。保し彼等も
間をする方が他日の為の利益になると私は考
へる。彼等元来は造
特の人物を書いて
もあつたが、惜しいかな、其間の素養が無へたから書
八
但彼はあの時竹俣は川端玉章の師事し
八火社と云ふを創立し、国定教科書の挿画を拵

（教）
（体）

[illegible]

[illegible]

北一戦

文部産の儒子の徽猶なる州源の二字が三流の書に
[illegible]ことの二字は徽金の記
[illegible]が、丸四の婦人は[illegible]儒子を
用いること、北邪を切り棄てて一往の楚節と
(一丁度臂を出す)
[illegible]を現ハしてある。
[illegible]君戯者は生殖
を聯想しん坊さも源を相違ういと皮肉うこと
なる。東郷元帥が四星を焼れ大海戦を北

17

一戦云々の[illegible]大[illegible]（弾）（不杉の大文章此ハ）

今ハ報恩[illegible]

[illegible]天帥ハ義提の[illegible]伊勢浦

の上陸し此時、生酒橋の[illegible]

ハ[illegible]敵の[illegible]の[illegible]一戦の三字を書[illegible]

む見ハ[illegible]橋を生命とする[illegible]

義一の三字ハ[illegible]の二字を[illegible]

が坂の神[illegible]此[illegible]（愛は表）と書いれ[illegible]

（いつう先 雅徳と 書いれ）

17

とおもふと云ふも、泡真の元帥は恐らく其意を得たゆゑに、
業績のことを語り滑稽を弄するは、エモリストの慣用手段に過ぎ
が出来ぬ所あるなり。エモアの效果が多いのである。話は変
あが此頃聞けば、考証家らしく真面目の研究家の範圍れ「独
後家授し」と云ふ通法があると云ふ。爰れ正に目テツクの書
業だと仔細を熟と見ると、考証家のあざけんとある
研究者判は多く名家の識らん、そんが門外不出とする
てあるのが、未だ人の知らぬ所へ出て、北面
法があると云ふ譯を聞けば、如何も道理だと思ふが、何分